The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大高順雄先生のこと
Author(s)	小林, 宣之
Citation	Gallia. 2022, 61, p. 121-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87604
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大高順雄先生のこと

小林　宣之

大高順雄先生とぼくとの出会いは 1972 年 4 月のことです。一浪して大阪大学に入学したぼくはフランス文学を専攻したいと考えていましたので第 1 外国語にフランス語を選択しましたが、そこで初級文法の手ほどきをしてくださったのが大高先生でした。1931 年生まれの先生は当時 41 歳くらいだったはずですが、かなりのスピードで授業を進められ、ついて行くのに四苦八苦したことを思い出します。

その後、学生時代のぼくと大高先生の関係はほとんどないに等しいものでした。仏文科に進学して、先生の中世フランス文学の講読の授業に出席したこともありましたが、いきなり cas sujet とか cas régime といった聞いたこともない文法用語が頻出し、それを既知のこととしてハイペースで進められる授業に恐れをなして早々に退却してしまいました。人よりかなり遅れて何とか博士後期課程まで進み、33 歳で単位取得退学していくつかの大学の非常勤講師と塾の講師を糧に何とか自活を始めた頃、友人の岩根久さんから思いがけず就職の話がありました。岩根君は大高先生と親しく、先生が関係しておられた大手前女子大学がフランス語の履修者の急増で専任講師を募集しているから応募しないか、と声をかけてくれたのでした。

大高先生は西宮市にあるその女子大学に設置されていたアングロ・ノルマン研究所の所員を兼務され、後に学園の理事長に就任されることになった福井秀加先生とアングロ・ノルマン語の文献研究に従事しておられるということでした。その縁で新任の講師探しも委嘱され、岩根君にも心当たりを尋ねられたのだったでしょう。のんびりと怠惰な学生生活を送り、留学経験もなく、いくつかの国立大学の公募の選にもことごとく漏れて、これでは就職はまず無理と観念し始めていたぼくにはありがたい話でしたが、岩根君のせっかくの友情をもってしてもそう簡単には行くまい、と多くを期待してはいませんでした。ところが、意外にも話はトントン拍子に進み、35 歳にしてようやく定職を得ることができたのは偏に大高順雄先生のおかげ、先生はぼくの人生最大の恩人と思い定めて今日に至ります。

そうしたわけで、ぼくと大高先生の関係は大手前（女子）大学を介してのものに限られます。先生は阪大を退官後、予想に反していったん関西外国語大学に移られ、数年後に勤務先を同じくすることになりましたが、所属先のキャンパスが異なっていたため、先生と日常的に接することはしばらくの間ほとんどありませんでした。

就職後も、世間知らずのぼくはいろいろと先生のご心労を煩わせたようです。

君、こういう言動をしたそうだが、ぼくの立場も考えてもっと慎重に行動してくれないと迷惑だ、というような苦言を何度いただいたかわかりません。にもかかわらず、先生にはずいぶん可愛がってもいただきました。就職後間もなく、まだ健康を害していらっしゃらなかった先生に誘われて十三の飲み屋やバーを梯子したのも、今となってはなつかしい思い出です。同じ店にじっくり腰を据えるタイプのぼくとは違って、先生はしばらくすると、君、店を変えましょう、とすぐ店を出てしまわれます。また、カラオケのある店ではマイクを握って軍歌を歌われます。君も一緒に歌い給えといわれて閉口したことにも、今はまた別の感慨を誘われます。ところがある時、恒例の節季のあいさつをお送りしたところ、君はぼくを殺す気か、と言われて驚いたことがあります。ビールの詰め合わせを贈らせていただいたのですが、当時同僚で伊丹キャンパスにおれられた伊藤了子さんから、先生は健康を害されて禁酒されたのよ、と教えられました。

そういう付かず離れずの関係であった先生から親しく声をかけていただくようになったのはいつの頃からだったか、おそらく大手前を退職されてご研究に専念されるようになってからだと思います。図書館で偶にお目にかかり、職員から、大高先生にこれこれの文献入手を依頼されたと聞いたり、第六高等学校ゆかりの郭沫若に関する著作を物されたり、英語学が専門の和田章先生と共訳書を出版されたりと、その衰えることのない多岐にわたる向学心に感じ入ることがしばしばでした。

先生は必ずしも書斎に閉じこもるタイプの研究者ではなく、梅田界隈のいろいろな飲食店をよくご存じでした。君とランチを共にしたいから出てきませんか、もう僕はあまり食べられないんだが、良いレストランがあるんだ、阪急神戸線の梅田駅改札口で午前 11 時 30 分に待ち合わせましょう、とお誘いがあるようになったのはここ 10 年くらい前からのことでしょう。先生のご父君が岡山の出身であり、また阪大に赴任する前に岡山大学に職を得ておられた時期があったこともあって、同郷の誼というお気持ちもおありだったのかもしれません。

ぼくの研究対象は先生のご専門とは無縁な 19 世紀の作家なのですが、時折そのことを気にかけてくださっているような言葉を口にされて、先生もお歳を召されたのかな、と思うこともありました。ところが、必ずしもそれだけではなかったのだと後に知ることになります。最後にそのエピソードを記して、あてどない思い出話を締め括らせていただきたいと思います。

ネルヴァルに関心を持ち始めた学部学生の頃、ぼくは中村真一郎という作家が日本で最初にこの「夢と狂気の詩人」を卒業論文に取り上げたことを知り、そのことに触れた『西欧文学と私』（三笠書房、1970 年）を図書館で見つけて読んだりした記憶も甦ってきます。折しも中村真一郎を監修者の一人とする筑摩書房版旧版『ネルヴァル全集』や、この作家のライフワークとなる『四季』四部作の出版が開始された時期でもありました。とりわけ、足かけ 9 年をかけて完成された『四季』連作の第二作『夏』には一驚を喫しました。折に触れネルヴァルに対する執心を漏らしてきた中村真一郎が、この作家を知らない読者にはそれとわからな

い形で、しかもこれ以上はないという露骨な形で作中にオマージュを潜ませていたからです。しかし、これを最後に、中村真一郎に対するぼくの関心は影を潜めました。ネルヴァル研究を継続する上で、この日本人作家への関心がこれ以上役立つことはあるまいという気がしたからです。それから長い時が経ち、ある偶然から、ぼくは改めて中村真一郎の作品を読み直すことになります。1997 年の作家の死後、「中村真一郎の会」というものがいつの間にかできていて、その幹事の一人だった入沢康夫氏から、その会誌に中村真一郎とネルヴァルの関連に関する記事を募るお誘いが「ネルヴァルの会」にあり、それなら、小林さんが書いたらいいんじゃないのということになり、といった事情からでした。学生の時の驚きに形を与えてみるのも面白いかもしれないと引き受けて書いたぼくの記事は、その後思いがけず連載に発展しました。拙稿の掲載誌が出るごとに、大高先生は簡単なコメントをすぐに届けてくださるのが常でした。中村真一郎の文章からの引用に含まれていたイタリア語の「初歩的な間違い」を、ぼく自身の無知として指摘してくださる先生の寸評に学生時代に戻ったような錯覚を覚えながら、その都度の文言の端々にふと、先生はこの戦後作家に対して前々から親近感を抱いていらっしゃったのではないかという気のすることがありました。

幹事の末端に連なって、常々会誌の寄稿者集めに苦慮するのを傍で目にしていたぼくは、思い立って先生にご寄稿を依頼してみました。快諾された先生の論考「中村真一郎における意識の流れ」は『中村真一郎手帖』第 12 号（2017 年 4 月）に掲載されています。はたして、特異な漢字カタカナ混じりで綴られた論考の冒頭に、先生の中村真一郎とのただ一度の出会いの経緯が印象深く語られていました。一読して目に浮かぶ大高青年の面影は、後年の先生しか知らないものには意外な、ゾラを研究してみようかと漠然と考えているらしい初々しい姿です。東大仏文科の研究室で先生と偶然出会った中村真一郎は、短い言葉のやり取りの最後に、「トコロデ、君ハネルヴァールヲ知ッテイルカネ」と言い残して立ち去ったそうです。大高青年は「私ハネルヴァールハ知リマセンガ、勉強シテミタイト思イマス」と記したメモを、当時助手だった二宮敬氏に託したそうですが、これが機縁となって、その後「大高順雄君のために」という自筆献辞が記された新潮文庫版の『火の娘たち』が届きます。「一気ニ読ミ終エ」、「神秘ノ時間軸ノ上ニ展開サレル愛ト悔恨ト幻想トニ魅惑サレ」た先生は、しかしその後、その「貴重ナ贈リ物」は失われて現在は手元になく、思い返すごとに「慙愧ニ堪エ」ないと回顧される先生の筆致には、世間に周知されている先生の姿とは異なり、19 世紀フランス文学の研究者としての道を歩む可能性もあり得たのだ、という先生ご自身の感慨も想像されます。ぼくと先生との関係の背後には、優れた学者とその不肖の元学生、その元学生に偶々施された恩顧、これに加えて同郷の縁、といった世にありふれた事柄以外にも、偶然に研究対象にネルヴァルを選んだぼくとその作家に若年から深く心酔していた日本の往時の流行作家、その作家と青年時に邂逅し憧憬した大高先生、そういう偶然の絡み合いも潜んでいたのかもしれません。

（大手前大学教授）